

研究ノート：

比較表現論の基礎概念管見

*北 岡 一 道

(2022年3月1日受理)

Some Comments on Contrastive Study of Languages

Ichido KITAOKA

Key words : contrastive linguistics Englishness, Japaneseness

1. はじめに

日本人のわれわれが英作文をしていると、「つくった<英文>が、文法的（合文法的）ではあるが、英語らしくない」、というコメントをいただくことがある。日本人としての表現のクセのようなもの、発想のちがいといったもの、といわれる。

この、もとめるべき傾向性がすなわち、<英語らしさ、Englishness>にあたる。英語からみれば、逆の様相が<日本語らしさ、Japaneseness>になる。任意の二国語のあいだで、対比的に、甲の言語の<らしさ>、乙の言語の<らしさ>が、観察されるだろう。

こうした現象をまとめたものが、表現論（、英語表現論、日英比較表現論など）といわれ、文法論、文体論などと交差する領域をなしている。それは、歴史、文化、世相などさまざまなものを反映したもののだろう。

本稿では、言語の非恣意的な側面、あるいは、ヒトの生物的特性からくるもの（の可能性）をすこしく、かんがえてみよう。

2. 言語の傾向性と表現論

対訳関係にある、日本語と英語の両文をみて、そのような表現は、翻訳としてなかなかおもいつかない、とかんじることが、ある。辞書の英語例文や、英語の小説に对照される日本語訳（あるいは、その逆）

といったもの。

たとえば、

<1> What made her do so?

（*？なにが彼女にそうさせたか。）

<2> Why did she do so?

（なぜ彼女はそうしたか。）

「なぜ彼女はそうしたか」という日本語をあたえられて、「What made her do so?」は、おもいつきにくい。また、その英文があたえられたとき、「なぜ彼女はそうしたか」と和訳してよいのか、「なにが彼女にそうさせたか。」という特殊な文体ではないのか、と初学者は不安になるだろう。

この例などは、勉強がすすむと、英語のクセ、英語らしいパターンとして学ぶことになる。その説明は、<1>の英語の和訳は「なぜ彼女はそうしたか<2>」が適当で、「なにが彼女…<1>」は不適当だというもの。後者日本語は文法的だが、文体的負荷が特殊だ、としている。

英作するばあいは、「Why did she do so?<2>」がOKなのはとうぜんとして、「What made her do so?<1>」も、ふつうにつかえる表現だと、やがてまなぶ。その英語表現に、（あまり）文体負加がないのである。

翻訳のまとめサイト、<翻訳コンニャク>で、「What made her do so?」の英文をいれて、日本語訳をもとめてみる。

*元 仁愛女子短期大学講師

<3> 翻訳例。(22/2/25閲覧。)

Google translate. なぜ彼女はそうしましたか。

(「彼女をそうしたのは何ですか。」という別訳が、でてくるときがある。)

DeepL. 何が彼女をそうさせたのか。

Papago translate. なぜ彼女はそうしたのか。

Weblio translate. 何が、彼女にそうさせましたか。

Excite translate. 何のため彼女にそうさせたか。
(これは誤訳らしい。)

ここで、GoogleとPapagoは、自動詞文として、訳してあり、日本語らしい。DeepLとWeblioは、他動詞文的で、いわゆる、こなれた日本語でない。

こうした<英語らしさ>、<日本語らしさ>をあつかう領域は、従来(実用語学的な文献では)、表現論といわれてきた。<日本語表現論>、<日英比較表現論>などと。<文法論>ほど截然とした領域の名称ではなかったが。

たとえば、日本語表現論は<日本語らしさ>をあつかう。現実的には、他言語との対照、比較のなかで、ポイントを指摘するのが、わかりやすく、実用的だ。

日本人が、英語で作文するとき、はなすとき、日本語的=日本的発想にひきずられがちになる。しかし、これこれの点に注意すると、日本語的クセのすくない、より英語らしい表現になる、というわけだ。

とうぜん、言語をほかのものにおきかえても、表現論はなりたつ。ちかくは、日韓、日中などについても、こうした議論がおこなわれている。

また、日本語のなかでも、諸方言の比較が文法・語彙にくわえて、おこなわれている。表現は、言語構造・言語項目とともに、状況や人間関係にもかかわる。県民性・地方性といった面からも言及される。

比較ということばは一般的なことばだが、研究分野の呼称として、一応、<比較>、<対照>、<類型>のことばが、熟したいいかたとして、ある。それぞれ<歴史系統の比較>、<共時的な二者比較>、<共時的な三者以上の比較>をあつかう。だから、うえで<日英比較表現論>などといってきたものは、ターム的には<日英対照言語学>がふさわしい。

うへの<1>、<2>であるが、高校生のひとつたちは、<無生物主語>の例として、まなぶかもしれない。

つまり、日本語では、ふつう<無生物名詞主語(ここでは<なに>)>が主語にならないようなケース。英語では、無生物主語(対応する<what>)が主語になっている。

3. 表現論における指摘

表現論において、いくつかの、概括的な指摘がおこなわれている。たとえば、

<4> 英語は名詞が優勢、日本語は動詞が優勢。

<5> 英語は他動詞が優勢、日本語は自動詞が優勢。

<6> 英語は<する言語>、日本語は<なる言語>。

<7> 英語は対立的、日本語は非対立的。

ここで<4>や<5>は、名詞あるいは、動詞という語彙グループが、優勢ということである。同時に、名詞中心の構文あるいは、動詞中心の構文が優勢ということでもある。

さきの「What made her do so?」の日本語らしい訳語は「なぜ彼女はそうしたか。」である。「What」は、<無生物主語>の例であると、同時に、名詞(類)が優勢な構文になっている。「made、させた」は優勢な他動詞のあらわれる構文で、対応する和訳には、相当表現がない。

<4-7>では、日英語が対照的にとらえられている。これらは、(圧倒的であっても)傾向性にとどまっていて、截然としたものではない。その傾向性のもさしのうえには、さまざまな言語が、より右にあるいは、より左にならぶ、といったとらえかたである。

こうした表現論的な傾向コメントとして、さらにつぎのようなものがあるだろう。当該言語は日本語にくらべ、

<8> 表現に牧畜あるいは、農耕の示唆がおおい。

<9> 色彩語彙が細分化されている。

<10> 親族語彙が頻用される、など。

親族語彙の頻用については、日本語と英語であまり、ちがいはかんじられないかもしれない。が、ベトナム語では、家族にかんするタームに特徴的な機能があり、(ほぼ)文法構造にまで、浸透している。

たとえばベトナム語で、「anh、アイン」は普通名詞的に「兄」を意味する。「兄」だけに相当する。「弟」は別の単語があり、英語の「brother」とはちがう。

これが、まず、兄でない男性によびかける表現（呼格）として、一般に使用される。日本語で、「<兄さん>、こっちきて」や、「のもうぜ、<兄弟>」の親族語借用は、（やや？）卑俗な表現とされるだろう。

だが、「anh、アイン」はニュートラルにつかわれ、文体負荷がない。したがって、相応する日本語が存在しない。

また、「anh、アイン」は、対面する相手を文内要素とすることができ、「あなた」と訳される。そのため、（すくなくとも実用語学では）二人称代名詞とされることがおおい。

しかしこの語は、二人称表現グループ「[ông / bà / anh / chị]」などの語彙場のなかで、相互規定された、特殊な意味、用法をもっている。イメージ的に、「anh<you>」といえるだろう。グループの直訳は、「祖父 / 祖母 / 兄 / 姉」。

さらに、「anh ấy」は、代名詞、「彼」に相当するとされる。しかし、これは直訳すると、「その・兄」になる。用例は、

<11> Anh ấy đã đến chưa? Has he come yet?

<12> Anh có thể giúp tôi được không? Could you help me?

（両例は<Dict.com>から、ただし、ごく一般的な表現。22/2/25閲覧。）

このようにして、「anh、アイン」は機能的に、

「普通名詞、あに → 呼格、（あなたよ）」

→ 二人称、あなた → 三人称、（その）かれ」

というふうに展開している。そして、普通名詞が普通名詞の機能を（共時的に）たもったまま、文法要素となり、体系を構成している。他の、家族のタームも、にた展開がみられる。

ざっくりいうと、日本語で、

「お兄さん → （あなたよ） → あなた → かれ」

というところを、ベトナム語では、

「お兄さん → お兄さん → お兄さん →

その・お兄さん」

と表現するのである。

日本語と英語の表現の対照研究について、池上嘉彦氏は、英語/日本語を、<スルの言語/ナルの言語>と指摘しておられる。

（池上、1981、107-08ペ）自然の中に置かれた原始的な人間の姿を考えてみれば、それはおそらく自分を遥かに超えた大きな自然の力に左右される覚束ない存在であったろうと想像される。そこにあるのは、自分より大きな自然の力に順応することによって生きて行く人間の姿である。しかし、やがて人間が自らの力を自覚し、それを通じて自然に働きかけ、自ら望むようにそれを変えていこうとする段階が来る。……一方では、〈出来事全体〉を捉え、事の成り行きという観点から出来事を表現しようとするいわば「ナル」的な言語と、出来事に関与する〈個体〉、とりわけ〈動作主〉としての〈人間〉に注目し、それを際立たせる形で表現しようとする言わば「スル」的な英語という対立があるように思われる。

そのなかで、氏にしたがうと、世界はそれぞれ言語形式として、〈なりゆくもの〉あるいは、〈なすもの〉として、とらえられている、とあってよいだろう。後者は、主体が他者に〈なす〉（つまり対立的に制約をくわえる？）ことを典型形式としている。前者は、主体・他者が典型形式でなく、世界は全体として、〈なりゆく〉（つまり非対立的にうつろっていく？）と、みるかたちなのだろう。

4. 霊長類コミュニティと生物的基底

人間のコミュニケーション（つたえること）のはじまりを、平田オリザ氏は、二種のコミュニティをいききすることで生じてきたと想定しておられる。

（平田、2017、講演と資料）あらゆる生物のなかでヒトだけが、「家族」という集団と「群れ」という集団の両方に所属する。ゴリラは、家族単位で行動し、チンパンジーは群れ単位

で行動するが、ヒトはその両者を往還する。そのため我々はなにかを伝えるという必要性にせまられた。

氏は、ここでいう〈往還=いったり・かえったり〉についてたとえを、だしておられる。原始のこと、父親が狩りにいって、かえる。狩りで、大きなマンモスをみた。そのことを、家族のもとにかえり、つたえる。

また、家族から〈マンモスの肉をとってきてほしい〉と要求される。狩りにでかけて、そのことを狩りのなかまに、つたえる、というわけだ。

講演の目的は、もともと演劇の起源、あるいは基本的機能を説明することにある。うえのようにみた、つたえること（伝達、コミュニケーション）のほか、社会における合意形成が指摘される。

平田氏は、類人猿であるゴリラとチンパンジーをとりあげておられるが、生物的にヒトにちかいことを前提しておられるのだろう。これらとは、とおい種になるサルだが、ゲダラヒビのコミュニティについて、興味ある知見が近年、蓄積されつつある。

河合雅雄氏は、1973年にゲダラヒビにであって（調査して）たいへんおどろいた、とのべておられる。（河合、2017、1ぺ）霊長類にかんする常識、従来の説明がくつがえされた。

以前は、霊長類の社会（一般）のしくみの基本は、順位制とテリトリー制だといわれてきた。それぞれの個体が群れ社会のなかで、優劣の順位があり、それが社会の秩序となっている、とかんがえられた。

こうしてできた群れと群れは、それぞれじぶんのテリトリーに属し、他のテリトリーと対立している。ゲダラヒビには、こうした、順位制やテリトリー制が、まったくみられなかったのである。

かれらは、

（河合、2017、1ぺ）リーダー雄を中心に、複数の雌と子どもたちから成るグループをワンメール・ユニット、略してユニットと呼ぶが、これらユニットが集合して大きな集団をつくる。この集団をバンドと呼ぶ。ニホンザルの群れに相当する集団である。

これまでの霊長類では、ユニットの雄たちに優劣の順序があり、それが、ユニット群が共存するために必要な秩序とかんがえられた。ところが、ゲダラヒビの観察から、雄たちに順序がなく、ユニット間でも、順位制がない、ことがわかった。

たとえば、水のみ場での観察。生息地で水がすくなく貴重だ。群れが水場にくると、順位制にしたがえば、優勢なユニットから順に水をのむはずと予想された。

しかし、ユニットは先着順で水をのみ、他のユニットはその間ただ、まっている。その様子が、はじめ河合氏にはしんじられなかった、という。ニホンザルや、チンパンジーの順位社会とまったくことなるからだ。

ゲダラヒビは総じて、個体間、集団間のあらしをさけ、協調を主軸にした平和な社会をつくっている、という。重層社会といわれ、対立を抑制する宥和行動、あいさつ行動が発達している。

また、食餌場でバンドは他のバンドと対立せず融合し、あらしは、おこらない。このように、霊長類でテリトリー性も対立性もないのは、はじめての発見だった。その後、こうした、平和主義のサルは、ボノボ、ベニガオザルなどがみつかった。

さきにゴリラは家族しかもたない、とした。霊長類で唯一、ゴリラはテリトリー性がないのだが、集団どうしがであうと、はげしく戦うのである。

そして霊長類社会には、攻撃・対立が基調の社会と、親和性・協調が基調の社会の2タイプあることが、わかった。さらに氏によると、

（河合、2017、4ぺ）ヒトは霊長類の進化によって誕生した特異な生物である。ヒトの特異性のひとつは、以上の2系列の性質を内包した存在だということである。

平田・河合両氏にしたがうと、ヒトは、（他の霊長類と対照的に）家族と社会を内包し、また、対立と非対立を内包する、と示唆される。

5. むすび

うえで、言語における表現の傾向性と、それに関連すると期待される非恣意的な側面、とくに生物的基礎（若干の可能的側面）をみてきた。その関連性は、可能性にとどまるが、ここでは示唆として、かんたんに、まとめておく。

第1に、言語には表現論の側面が存在する。言語構造（≡文法性）本体によりそうかたちで、言語（の領域ごと）に、その言語らしさという現象世界がみられる。

第2に、個々の言語の〈らしさ〉の基礎に非恣意的な側面があり、そのひとつに、生物的レベルがある。霊長類のなかで対照させれば、〈家族、社会〉、〈対立、非対立〉の軸があらわれる。

6. 参考文献

1. 池上嘉彦. 「する」と「なる」の言語学. 大修館書店. 1981.
2. 楳垣実. 日英比較表現論. 大修館書店. 1975.
3. 河合雅雄. 争うことをさけている平和主義のサル. 共生のひろば9, 1-6. 2014.
4. クレイグ, ウェルチ. エチオピア草原に生きるゲダラヒヒ. ナショナル・ジオグラフィック. 23, 78-101. 2017.
5. 平田オリザ. コミュニケーションの装置としての演劇. 第7回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウム配布資料(と講演). 2017.
6. 南満幸. 日英比較表現論(6). 稚内北星学園大学紀要(17), 45-62. 2017.

7. 付記

言語非恣意性と生物記号論について、情報の所在をおしえてくださった、仁愛女子短期大学教授、大西新吾先生にお礼もうしあげます。〈終了〉